

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24720132

研究課題名(和文) 活人画流行の実態とその文学表象研究 19世紀半ばから20世紀初頭を中心に

研究課題名(英文) The Popularity of the Tableau Vivant in the Victorian Age: Historical Facts and Its Representation in Literature

研究代表者

浦野 郁 (Urano, Kaoru)

共立女子大学・文学学部・准教授

研究者番号：80612746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ヴィクトリア朝期のイギリスで大流行した「活人画」という珍しい娯楽について、1. 歴史的な事実、2. 文学作品における表象、という二つの点から研究調査を行った。その結果、初めは上流階級の私的な娯楽であった活人画が徐々に大衆の人気を博していった様子や、19世紀末にかけて活人画が芸術か否か、という結論を見ない論争が巻き起こっていたことが明らかになった。その過程には、技術の進歩によって視覚体験が劇的に変化した時代に、人々が芸術に対し抱いた欲求や郷愁、戸惑い等の複雑な意識を読み取ることができる。文学作品における活人画の描かれ方も、こうした歴史的な状況を反映したものになっている。

研究成果の概要(英文)：This research looks at the Victorian popular entertainment called "the tableau vivant" from two perspectives: historical facts and its representation in literature. In the beginning, the tableau vivant was privately performed by the upper class as a refined amusement, but it gradually gained popularity and came to be practiced by people of other classes. Toward the end of the nineteenth century, the artistic legitimacy of the tableau vivant stirred a welter of controversy. In this we can see the mixture of desire, nostalgia, and hesitation people felt about visual arts while their visual experience underwent an unprecedented change. The representation of the tableau vivant in literature also reflects such historical situations.

研究分野：イギリス文化・文学

キーワード：活人画 視覚芸術 ヴィクトリア朝 劇場文化 芸術における検閲 英米小説

1. 研究開始当初の背景

活人画とは、19世紀半ばから20世紀初めにかけてのヴィクトリア朝期イギリスで大流行した娯楽である。人々が著名な絵画や文学作品、歴史的事件の一場面を模した衣装を身にまとい、一定の時間静止、沈黙してまさに「絵の中の人物のように」なりきる余興だが、現在まで娯楽形態として残っていないため、ほとんど研究がなされてこなかったのが実情である。

本研究では、絵画・演劇・文学のジャンルを横断するこの風変りな娯楽を、イギリスの視覚文化の変遷のなかで鍵を握る現象として位置づけ、活人画流行の歴史の実態と共に、文学作品に描かれる活人画を考察の対象とする。

2. 研究の目的

19世紀半ばから20世紀初頭は、テクノロジーの発達によって写真や映画を始めとする新しい視覚体験が次々に広まり、人々の「見る」という行為が本質的に変化した時代である。本研究ではまず活人画流行の歴史の実態を明らかにし、この流れの中で適切に位置づける。その上で、人々の意識の変遷や相反する欲求を描くのに最も適した媒体である文学作品における活人画の描かれ方に注目し、考察する。

3. 研究の方法

活人画流行の歴史の実態については、少数ながら存在する先行研究を参照すると同時に、より詳しい事実を把握するため、ヴィクトリア朝期に発行された定期行物のデータベースを用いて活人画に関する記事を数多く収集する。その上で、有効な時代区分やジャンル分けの可能性を模索する。

文学作品における描かれ方に関しては、活人画を直接的・間接的に扱った文学作品を数多く見つけ、活人画が物語の中で果たす役割を明らかにすると共に、実社会における活人画の捉えられ方と文学作品中の描かれ方にはどのような関連性があるかを考察していく。

いずれの場合も、国内で入手困難な資料はイギリスに赴いて収集する。

4. 研究成果

申請時には、娯楽形態として現代に残っていない活人画に関する資料を見つけることはかなり困難ではないかと思われたが、研究期間を通じて予想外に多くの資料を収集することができ、流行の実態についても文学表象における特色についても、興味深い事実が数多く判明した。以下、流行の歴史の実態と文学作品に登場する活人画の二つに分けて記述する。なお、参照した英文資料では活人画に当たる娯楽は *tableau vivant*, *tableau*, *pose plastique*, *attitude*, *living picture* など様々な名で呼ばれるが、同じものを指すため

以下では全て「活人画」と記す。先行研究が主な情報源となった場合は、()内に著者名を記す。

(1) 活人画流行の歴史の実態

活人画の起源は中世ヨーロッパで新しい君主が入城する際、市民が歓迎の意を表すために行った催しにあった(京谷啓徳)。これが近代に入ってから大陸の上流階級の間で私的な娯楽として広まっていく。特に良く知られたものとしてイギリス人 Emma Hamilton が18世紀末にナポリの邸宅で行ったものが挙げられる。薄いショールをまとうて神話や伝説上の人物を演じる出し物は Hamilton 邸に出入りする貴族や芸術家の間でセンセーションを巻き起こし、ゲーテが『親和力』の中で取り上げたところから、広く知られるようになった(Barry J. Faulk)。

これがイギリスにもたらされたものと考えられるが、記録が多く存在するのは主にヴィクトリア朝に入ってからである。研究代表者が2012年の夏に British Library で行ったリサーチによれば、活人画に関する新聞雑誌等の記事は1860年代から特に多く見つかるようになり、貴族の館で行われる活人画の催しについて、演目や演者、観客の反応まで事細かに報じられている。中には皇太子夫妻が出席したものや、素材となる絵画を描いた画家本人が演出に当たったという記録もある。またこの頃になると、James H. Head, *Home Pastimes; or Tableaux Vivants* (1860) や Henry Dalton, *Drawing-room Plays and Evening Amusements* (1861) のような、活人画を一般家庭で楽しむための詳細な指南書も多く出版されており、上流階級の娯楽がそれ以下の階級の間でも人気を博し、広まっていた様子が伺える。

1870年代に入ると、劇場など公の場で行われる活人画に関する記事が増えてくるが、中には有名な裸体画を模倣するという名目で、薄いタイトのみを身に着けた女性が出演するものが現れる。こうした催しは時に警察による捜査の対象となり、主催者や出演者の逮捕を報じる記事が見つかるようになっていく。この頃から活人画が芸術的なものであるのか、それともそうではない、猥褻なものであるのかという問題が意識されるようになってきたようである。この傾向は80年代も続くが、この頃になると記事に絵ではなく写真が添えられることが増え、活人画の様子をより具体的に把握することが可能になる。

このように数多くの記事に目を通した結果として、当時の活人画は次の4つのタイプに類別できると考えた。

上流階級および上層中産階級の私的娯楽としてのもの

の流行を受け、それ以下の階級によって私的に楽しまれたもの

劇場など公の場で上演され、高い芸術性

と啓蒙効果を謳うもの
劇場など公の場で上演され、女性の身体
の露出度が高く煽情的と捉えられかねない
もの

さらに1890年代に入ると、「芸術か猥褻か」
の問題がさらに激しい論争を呼ぶことになる。
きっかけを作ったのは、イギリス女性禁
酒協会 (The British Women's Temperance
Association) の会長 Lady Henry Somerset
が、1894年に *The Woman's Signal* の一面に
載せた記事である。この中で Somerset は当
時 The Palace Theatre で行われていた活人
画における女性の身体の高さを指摘し、出
演者である女性たちの純潔を守るため、
当局による取り締まりを求めている。こ
れに対して議論が百出し、最終的には出
演者である労働者階級の女性たち自身よ
って、自分たちが行っている行為は芸術
であり、何ら猥褻な意図はない、という
反論がなされる事態となった。同じ年、
Somerset はやはり活人画が流行してい
たニューヨークを訪れ、同様の主張をし
て上演を止めさせようと試みている。し
かしいずれの国においても活人画を巡る
彼女の主張は社会活動家たちの強い関
心を引き出すことは出来ず、法整備等の
目に見える成果を上げることがなかった
(Barry J. Faulk; Jack W. McCullough)。

同2012年に研究代表者が Victoria and
Albert Museum で行ったリサーチでは、「
芸術か否か」の問題に関連して、活人画
がもう一つ別の問題系にも取り込まれて
いることが明らかになった。Julia Margaret
Cameron, Lady Clementina Hawarden,
Henry Peach Robinson といったヴィク
トリア朝期の写真家たちの作品には、
絵画や文学作品の一場面を模したもの
が見られる。これらは“staged photo”
と呼ばれ、フィルムに収めることを前
提に演出されているという点で、一種の
活人画として捉えることが出来る (Marta
Weiss)。誕生して間もない写真技術を
芸術に高めようとした際、当時の人々が
絵画的要素を追及し、虚構の場面を演
出したことはある意味自然である。しか
しその後写真が次第に写実性に価値を
求めるようになる中で、こうした作品
群は邪道なもの、劣ったものとして批
判されるようになっていき、その再評
価はまだ始まったばかりである。

活人画と写真の関係についてさらに研
究を進めるうち、より自然で真に迫った
絵画表現を追求したラファエロ前派の
画家たちが、作品を描く準備段階で写
真技術を活用していたことも明らかにな
った (Michael Bartram)。中世の伝説
や文学作品の一場面を模し、下絵の役
割を果たしたこうした写真群も、一種
の活人画と捉えられる。もともと活人
画は絵のように静止するというその性
質上、写真との親和性が高かったと考
えられ、黎明期の写真を巡る、写真は
芸術たりえるか否かという問題、さら
には絵画におけるリア

リズムの問題も、活人画の流行と関連
づけて論じられることが分かった。

そもそも19世紀に入って活人画が人
気を博した背景には、大量消費社会の
幕開けにおいて、あらゆるものを視
覚イメージ化したいという人々の欲求
や、従来の絵画芸術に抱いたノスタル
ジアといった、相反する要素があっ
たのではないかと考えられる。これに
加え活人画は、どれだけオリジナルに
迫れるか、という「模倣」に創造性を
発揮する極めて逆説的な性質を持つた
ため、その芸術的な正当性には常に懐
疑が付きまとったのではないかと考
えられる。活人画が次第に「芸術か猥
褻か」、「芸術か否か」の論争に巻
き込まれていった過程には、複製イ
メージが氾濫しつつあった当時、視
覚と芸術を巡る人々の意識が激しく
揺らいでいたこと、そこには階級問
題や写真技術の進歩など、他の要素
も複雑に絡んでいたことが見て取れ
る。

その後20世紀初頭にかけて、活人画
は映画の人氣に押され徐々に衰退して
いったようだが、ロンドンでは少なく
とも第二次世界大戦時まで活人画が
上演された記録が存在する (映画『ヘ
ンダーソン夫人の贈り物』でも描かれ
た The Windmill Theatre の例)。さ
らに20世紀後半になると、『プロス
ペローの本』、『カラヴァッジョ』、『
真珠の首飾りの少女』など、文学作
品や画家の生涯、絵画に着想を得た
映画の中に活人画の手法を取り入れ
たものが現れる。また、少数ながら
現在でも活人画を実践するイベント
が存在することも分かった。アメリカ
西海岸ラグーナビーチで毎年行われ
る *Pageant of the Masters* や、
ドイツの村オーバーアマガウのキリ
スト受難劇などである。研究期間を
通じ、活人画は完全に消滅した娯
楽形態ではなく、現在でも珍重され
実践されていることが明らかにな
った。

(2) 文学作品に登場する活人画

研究期間の後半には、主にヴィク
トリア朝期の小説と短編を対象に、
活人画に関連する文学作品を収集し
た。それらは以下の3つに分類でき
る。

登場人物たちが活人画を演じる場
面を含む作品

登場人物たちが活人画を演じる場
面を含まないが、直接的あるいは比
喩的に、「活人画」という言葉を含
む作品

にも にも該当しないが、登場人
物たちが絵画の中の人物のように描
かれる場面があり、語りに活人画の
影響が見いだせる作品

研究期間中はこの中でも特に を考
察の対象とし、研究最終年度には、
活人画の様子が詳細に描かれプロ
ット上重要な役割を果たすジョー
ジ・エリオット『ダニエル・デロ

ンダ』(George Eliot, *Daniel Deronda* [1876])と、イーディス・ウォートン『歡樂の家』(Edith Wharton, *The House of Mirth* [1905])に関する論考を準備した。

『ダニエル・デロンダ』においては、主人公グエンドレン・ハーレスが『冬物語』の彫像となったハーマイオニを演じる。精神的に未熟なグエンドレンが美德の鏡として描かれるハーマイオニを演目に選んだ点に、彼女の虚栄心やこれから学ばなければならない道徳性が示唆されると共に、嫉妬深い夫から姦通の疑いをかけられる運命も予兆する重要な場面である。

『歡樂の家』では、主人公リリー・バートが社交界の集まりでジョシュア・レイノルズ作『リチャード・ベネット・ロイド夫人』を模した活人画を披露する。ロイド夫人が木の皮に愛する人の名を刻む様子は『お気に召すまま』に着想を得たものであり、リリーの胸の内に隠された思いを示唆する。彼女の美しさや創造的センスが評判となりセルデンの愛を得る契機となるが、欲望を煽られたトレナーに關係を迫られたことで転落の始まりともなるシーンである。

いずれの場面においても、活人画は主人公の魅力を際立たせつつ悲劇的な運命への転換を示すものとして描かれる。さらに、他の芸術作品に間接的に言及することによって、登場人物の内的願望や欠落などを示す効果も上げている。これに加え、(1)で明らかになった流行の歴史的事実と重ね合わせると、さらに興味深い点が明らかになる。70年代のイギリスで出版された『ダニエル・デロンダ』においては、活人画は主人公の自宅で家族や親しい友人などごく少数の人々を前に演じられる。活人画は上流階級の私的な娯楽として登場し、芸術か否か、という問題が意識されている様子は特に見られない。これに伴い、語りは活人画を観る者よりも演じる主人公の性格や心情を主に問題としている。

これに対し、「芸術か猥褻か」論争を経た20世紀初頭のニューヨークで書かれた『歡樂の家』では、活人画は社交界のパーティーにおける出し物として登場し、観客は『ダニエル・デロンダ』よりもずっと多いものとして描かれる。語りは活人画を観る側の反応の多様さに注目し、中でもリリーに理想美を見出すセルデンと、肉体的な衝動を感じるトレナーの反応とが対照的なものとして描かれる。活人画に出演したことが社会的転落の始まりとなる点や、トレナーがリリーの体つきに言及する箇所は Lady Somerset による主張と重なり、活人画の用いられ方は現実の論争を十分に踏まえたものと言える。

以上、(1)活人画流行の歴史的事実、(2)文学作品に登場する活人画、に分けて研究成果を記述してきた。研究期間と二度の出産育児の期間が重なり、成果を研究発表や論文の形で公にすることが困難だったため、今後は

順次業績化していくことを目指す。また、(2)に関しては、に分類される文学作品が予想していたほど多く見つからなかったという問題がある。現在では絶版になっている作品に活人画の場面を含むものが多く見つかるのではないかと考えており、そうした作品を検索するデータベースを見つけ、より多くの作品を収集するか、に分類される作品も研究対象に含めることを考えている。また活人画と類似する娯楽であり、しばしば研究者によっても混同されているシャレードも考察の対象とすることを検討している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

浦野 郁他、テン・ブックス、いま、世界で読まれている 105 冊 2013、2013、271 (210-212)

6. 研究組織

(1)研究代表者

浦野 郁 (URANO Kaoru)

共立女子大学・文芸学部・准教授

研究者番号：80612746